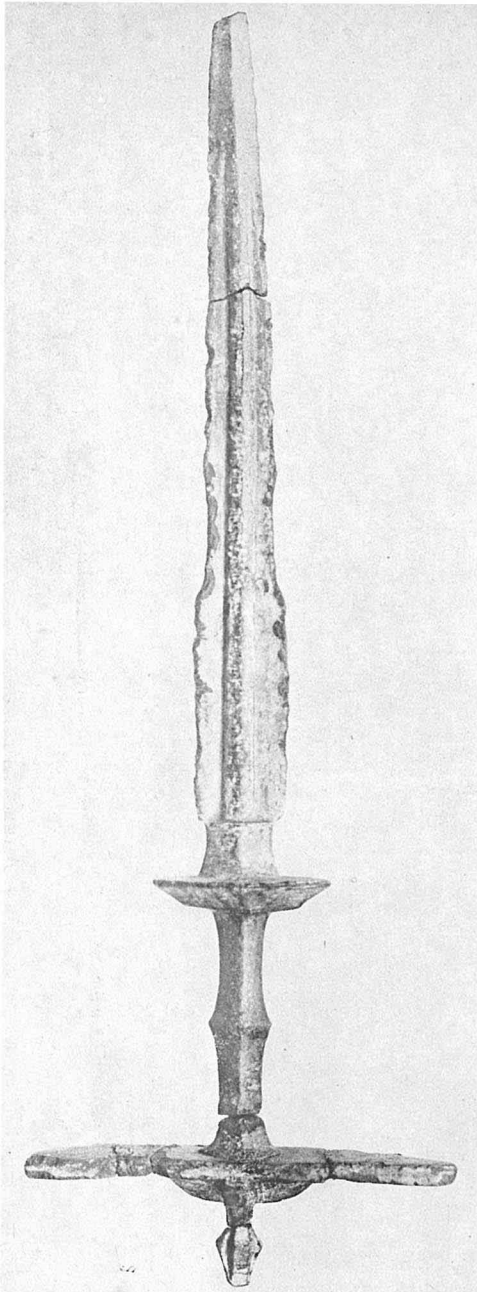
長門國大津郡向津具村久津出土飾柄銅劍（長一尺四寸七分）



長門向津具久津出土の飾柄銅劒

島田貞彦
小川五郎

一

昭和四年刊行の東方考古學叢刊第一冊「貔子窩」の本文補遺に「旅順要塞司令官山田少將の藏品に劒柄形銅器とも名く可く、我々の未だ嘗て見たことのない珍奇な品物がある。是は銅劒と共に牧羊城附近に於いて發見せられたものであると云はれるが、原田、田澤君等の探索によつて、城址附近の一古墳から出土したものであることが明かとなつた。其全形は圖(第一圖)の如く、內部に銀黑色を呈する奇妙な枕形品を篏裝し、外部には一種特有の透模樣を附したものである。其全體の手法と模樣は、南朝鮮其他から發見せられた所謂漢代の遺物と思はれるものと類肖し、周末漢初のものたることを推す可く、而かも其枕形品は梅原末治君等の報告に係る北朝鮮黃海道黃州郡黑橋面發見の所謂結狀銅製品に似て居る點が注意せられる。なほ類似の石製枕形品は旅順附近から屢々發見せられてゐるのであるが、我々の貔子窩發見品は、枕形の半部を示すのみであるけれども、其瓜の皮を切りむいた樣な特徵ある形は、如上の北鮮發見品及び牧羊城附近出土の銅器中の枕形品と趣を同ふしてゐると感ぜざるを得ない。但し此等のものゝ用途に至つては詳かに知り難いが何等か「マヂツク」の力を有するものとして、宗教的意義を有したものと想像し得るのみである」云々と濱田博士の紹介された劒柄形銅器は昭和三年十月、南滿洲旅順管內牧羊城官屯子の特殊な構造をなす石墓から出土したものであつて、博士の論述に見る樣に從來嘗つて其例

を見なかつたものである。而して該種銅器に關する最初の考證として爾來其不可思議な遺物の存在に多大の關心を拂ふに至つた。翌昭和四年、梅原末治君の海外から歸學さるに及び、同形遺品の博物館に收藏さるゝものの三個あるを報ぜられ、期せずして類品の確在を告げることゝなり、益々興味を惹く題目となつた。其後朝鮮平壤にて既出する二個（殘缺）を探求し、一は總督府博物館の有となり一は梅原君に據つて京都帝國大學考古學教室のものとなつた。然るに昨春たまゝ在滿洲の一邦人から撫順出土と稱する同形品を京都帝國大學に購求することゝなり、茲に僅々兩三年を出でずして七例以上を數ふるに至つた。輓近著しく擡頭して來た支那古銅器の研究は他方この異形銅器に就いての推究をも等閑視することを許されなかつた。されど其用途に至つては濱田博士の提唱せられた宗教的意義を多分に含むものとして殆んどこれに疑義を狹むものはない。然るに原田淑人學士は近刊さるゝ東方考古學叢刊第二冊「牧羊城」執筆中、本遺品の考究に觸れ、別に興味ある所說を提供さるゝに至つた。卽ち劍柄形銅器は名の如く劍柄に相當

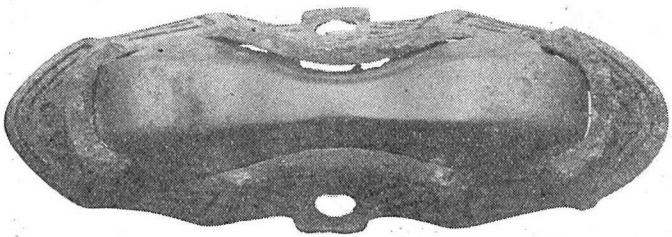
第一圖　牧羊城址附近發見劍柄形銅器（總高五寸）

するものであつて紐を通して異形銅器の個々の分解を防ぐと共に更に劍身に結縛したものとし寧ろ宗教的用具と云はんよりも古文獻に見ゆる七首に相當するものではなからうかとさるゝものである。

二

劍柄形銅器に就ては以上の二說を見てゐる。一はそれ自體の獨立せる宗教的用器であるとし、一は附屬する實用的用器であるとするものである

扨て該種の劍柄形銅器には往々細形銅劍を伴有するものの樣であつて、牧羊城及び傳撫順發見のものはいづれも身部の稍々濶い特異點を有する所謂滿洲式銅劍と共存してゐることは原田學士の提唱する銅劍附着の飾柄とするに合理な點を認められる。劍柄形銅器そのものの細部の說明は茲に記述することを省略するが、基本的形狀のものは數個に分解せられ、內部に石製又は銅製(空洞)の結紐狀器の篏め込まれてゐるものであることを再記して置きたい。

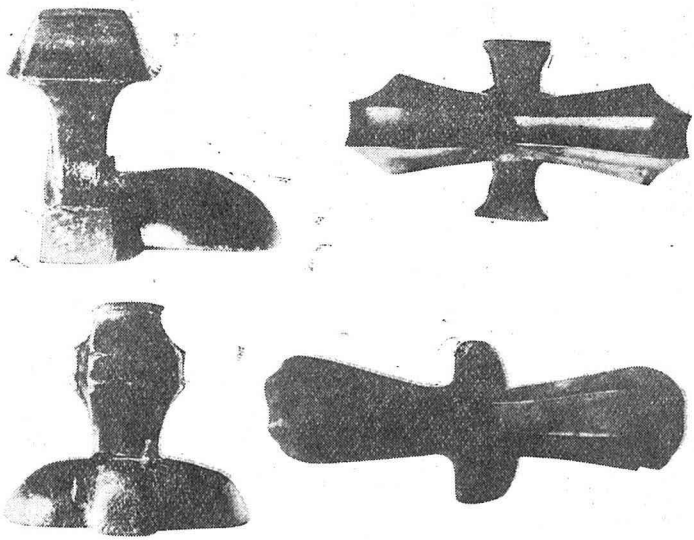


第二圖　牧羊城址附近發見銅器結紐狀部(平面)

茲に劍柄形銅器として主要な觀點をなす所謂結紐狀器は、從來單獨に發見されてゐる例證のあるものであつて曩きに擧げた滿洲旅順及貔子窩出土のものを除いて南北兩鮮及び我國にも類例を出してゐる。主要な發見地として北鮮では黃海道黃州郡黑橋面、平安南道大同郡大同江面土城里(二)(以上銅製)「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」朝鮮總督府大正十一年度古蹟調査報告第二冊)同道龍岡郡於乙洞古(石製)「樂浪郡時代の遺蹟」朝鮮總督府古蹟調査特別報告第四冊等であり、南鮮では慶尙北道慶州內東面坪里、同南山里(以上石器)梅原氏「朝鮮に於ける新發見の銅鉾並に關係の遺物」人類學雜誌第四十五卷第八號であり、更に我國に入つて對馬國上縣郡佐須奈村白岳(東京帝國大學人類學教室藏銅製)に發見されてゐる。

以上は劍柄形銅器及びこれに附隨して主要な位置を占める結紐狀器に關聯して不充分な略解を試みた。このこ

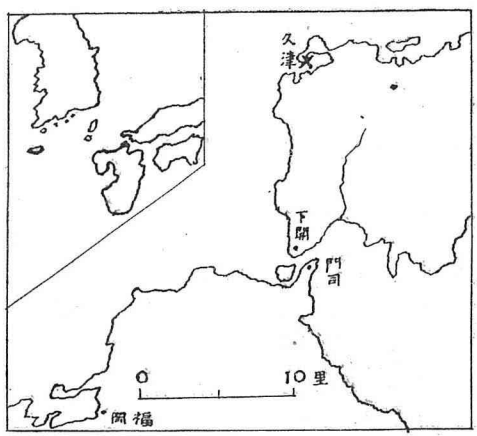
とは次に記載しようとする長門出土のものと密接な相關關係のあるものであつて、上述の見解を會得することが察されるからである。



第三圖　各地發見結紐狀器　右上北鮮黑橋面右下對馬（平面）
左上下北鮮大同江面（立面）

三

今次出土した長門國大津郡向津具村大字向津具下字久津は日本海に臨んだ中國の最南端にあつて、油谷灣の深く灣入した北岸に位置する。一衣海水を距てて朝鮮半島の東海岸に對し兩者の關聯を必然的に推究せしめる樣な環境をなしてゐる。



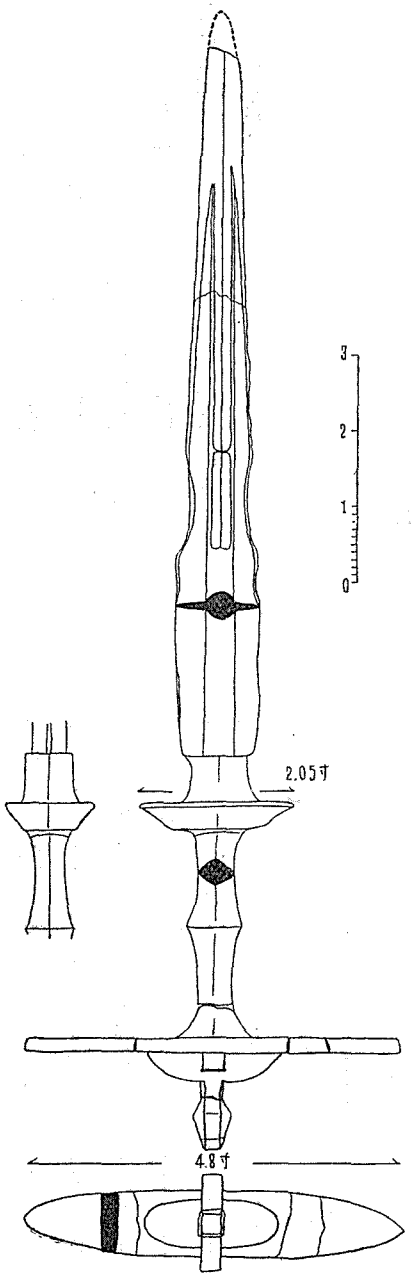
第四圖　長門久津所在指示圖

昨昭和六年七月下旬、小川は飾柄銅劍の存在を聞知し兩者の移行と特質を看取するに容易なものがあらうと推

たので翌八月初旬同地を踏査して遺物を親しく實査し、劍柄形銅器と關聯すべき貴重な資料であるを知り、所藏者の了解のもとに取敢へず山口高等學校歴史科教室に保管することゝなつた。この顚末を島田に報ずる所があつたので考古學教室に借覽を乞ひ、了解を得て京都帝國大學醫學部病理學教室の三宅宗悅氏の西下するに際し帶歸することが出來た。因みに遺物は今、所藏者のもとに再び襲藏されてゐる。

銅劍は今より約五十年前の發見にかゝり、其出土地點を知悉するものがなかつたので近き將來に再調を期することゝするが、故老の言を綜合するに單獨に出土したもので、特殊な遺構を認めなかつたと云はれる。

銅劍は破碎されて數個となつてゐるが、接合するに殆んど缺失する處のない略々完全に近きものである。たゞ



第五圖　長門國大津郡向津具久津出土飾柄銅劍圖

僅かに鋒先の一小部分を亡くするのみである。現存部の總長一尺四寸七分あり、完存するにしても僅かに五分内外を附加するに過ぎない。全形の溶範に據る鑄造で鑄通しとなつてゐることは注意すべきことである。大體の形狀は細形銅劍と劍柄形銅器とを結合したものであつて、恂に特異とすべき形式を具備するものであると云へる。圖によつて明かな樣に久津出土の銅劍は甚しく形式化するも將さしく細形銅劍と劍柄形銅器との複合形式であることは誰れしも疑ふ所はなからう。次に簡單に其形質を述べることゝする。

四

此の銅劍は今綠鏽に包まれ、所々毀傷してゐるが全形をほゞ遺存することは前に記した通りである。銅面甚しく粗であつて鑄放しと推定せしめる。該種舶載品に見る黑漆又は白綠瓜皮色の鋭利な感觸を與へる處がない。これは比較的含有銅の多いものであらうと想像するに難くない。此點は寧ろ朝鮮發見の古銅器に類肖するものであつて、製作地の那邊であるかを推測せしめる外面的な一つの暗示を齎らすものと云へる。

銅劍は細形の型式に屬し、身部完好すれば一尺となり莖部は劍柄の鏶（ハバキ）に相當するものが造り出されて、これに篏裝される形式となつてゐる。此部長六分。

斯樣に劍と柄とを結縛する事例は同樣の着裝を推知する有力な資料となるものである。曩きに梅原君に據り類した手法を暗示せしめる資料として指示された南鮮慶州郡入室里及北鮮大同江面出土の銅製有節劍柄の一端に四孔を穿つ例證は明かに莖を受け劍と柄とを結縛するに供したものであることを確證せしめるものであらう。而かも後者のものには久津例と同じく鏶に當るものが造り出されてあることは一層これを是認せしめる。

次に柄部には莖を受けた鏶に接して刀劍の鍔に相應する長二寸幅一寸二分の璏（或は琫とする）が造り出されてゐる。其下部は一個の節狀突起のある柄間（ツカアヒ）をなし把握する部分をなしてゐる。次に劍鼻卽ち柄頭に相當する部分を形成してゐる。この部分は二つに區別される。一は柄

間を受けてゐる長四寸八分、最大幅九分、厚二分の兩端鋭角をなし其形狀は棱形に酷似してゐるもの。二は其中央部に附加してゐる所謂結紐狀形のものであつて、長一寸七分、幅六分五厘、高四分をなし、この楕圓形の兩旁に角形の小突起を作り更に其中點から方柱狀を出し其尖端は切子形の紐狀結節を作つてゐる。其形狀は全く劍柄形銅器の結紐狀器と同手法なことが認められる。

五

以上は大略の形狀其他を記述したものである。この特異點の多い銅劍の出土によつて仰も何者を考察し得るであらうか。銅劍それ自體の製作乃至年代、或は劍柄形銅器との形式的移行及び地理的な關係、或は埋存遺跡の構造等擧げ來れば種々の至要な問題を提供する。このことは今日の資料を以てこの雜多な問題を咀嚼し盡くすことは出來ない。

たゞこの久津出土の銅劍の齎らす效果を卒爾ながら外形的と內面的とから推究してこの標識的な遺物の紹介を終ることゝしたい。

全形を單一のものとして鑄出されてゐることは形式學上から見て個々の分離して所作されたものに比し移行後出の形式であることは否定しがたい。この單一の鑄造によつて該種銅劍の着裝狀態を知り、更に不可思議なものとせられた劍柄形銅器の一つの確實な歸着點を認識し得た。このことは本銅劍の外形的使命として最も價値あるものであつて、古式銅劍の一新例として久津銅劍の存在を記憶さるべきものであらう。其他細部に亙る外形的な形式變遷は省略することゝして最後に內面的な考察の一二を提供して識者の是正を待ちたい。

先づ最初に銅劍それ自體の有する內面的意義として觀照さるゝものは劍柄部であつて、就中其結紐狀器の部分であらう。牧羊城官屯子出土のものは、該種の典型的標本とさるるものであつて、數個に分解せられ、個々の器形は假りにこれを劍身と結縛して一個の劍柄的用具となる事は肯定し得るも原田學士の所謂七首の外形的裝飾なりとするには餘りに分解的な構造を度外視するものでな

からうか。この點に於て濱田博士の提唱さるゝ劍柄形銅器とするそれ自體を强調して一個の獨立した把握用の宗教的器具であり、銅劍それ自體とは最初から柄頭としての發達形式をたどるものではなかつたらうと考へて見たら如何であらう。その兩者の有する外的相關がたま〳〵結合して宗教的な儀式的利器として兩者の存在をなしたものでなからうか。結紐狀器が如何なる「マヂック」的意義を有したかは想像以外のことであるが、他方劍鉾類は其鋭利な利器の精神から宗教視さるゝことは茲に述べるまでもない。かの西部日本特に北九州の銅劍銅鉾の特異な形狀はこれを有力に物語るものであらう。（高橋博士「銅鉾銅劍の研究」）斯樣に類推すると二者の結合によつて更に偉大な宗教的器具を現出したものとするに何等の矛盾をも感じないであらう。されば此種の劍柄形銅器は必しも利器と伴存するの必要を見ないものであるとも想像出來る。卑近な一例として擧げるならば佛教徒の宗教的器具とする「鈷」がたま〳〵利器と結ばれて「鈷劍」を形づくる樣なものではなかつたゞらうか。

六

北九州に於ける彌生式系統の甕棺から出土する青銅遺物は我國への金屬文化の新興であつて、實年代考定の上限として三雲、須玖兩遺跡の示すものは西紀前二三世紀に遡るものもあるが大體に於いて西紀元年を中心とした前後の間に置くのが最も穩當とされる。（「筑前須玖史前遺跡の研究」京都帝國大學考古學研究報告第十一册）

他方、劍柄形銅器乃至結紐狀器出土の遺跡を尋ねるに漢初支那大陸文化東漸の分布と相應し、或は特殊な銅製遺物を出土する等少くとも前漢時代のものであることを物語つてゐる。該種遺物の最も多出する北鮮樂浪郡地方はかの豪華な盛漢文化（「樂浪郡時代の遺跡」前出「樂浪」東京帝國大學文學部）に幾分とも先行して外來系とも接觸するものであり、實に周末以降各方の文化輸入接觸の重要な「ステーション」をなしたことは容易に想像し得ることである。周末漢初文化の東漸は北鮮では樂浪地方を基點として南北兩鮮に分布してゐるが南鮮康津の明刀の如き或は

南鮮入室里、永川遺跡の如く却つて奥地に點在することは東漸への時代と交通路を考察する一つの基準とならう。斯くして半島の南岸に出で一方、濟州島、對馬に他方、我國西部沿岸に波及して傳播の時期を西紀前後とするものである。

斯くして三世紀の後半乃至四世紀の初半には青銅遺物の流傳を見ることがない。此短い世紀間に文化相を異にするものの對立する事實は如何に解釋すべきであらう。

銅劍銅鉾の古式とするものは前漢代の大陸所產であり、銅鐸と最も密接な關係にある細文鏡も亦た同代を降らないものであらう。而して細文鏡の分布と半島に於けるそれを類推し、併せて共存する結紐狀器等の傳播を考察すると銅劍銅鉾及び銅鐸との接觸分布圈が自から中國近畿に一大圈圈を描き兩者銅器の古式と退化型式の各伴存を明示して居る。其上限には多少の系列的前後を認め得るも直ちに時代的序列を與へることは出來ない。されば銅劍銅鉾と云ひ銅鐸と云ふほゞ上限と下限との年代の等しく而かも分布圈を異にし從つて文化相の相違を示してゐることは結局半島に於ける大陸文化接受と其傳播の推究に待たざれば解決の鍵を握ることは出來なからう。たゞ此の點に於いて久津出土の銅劍は我國に於ける青銅文化傳播に對する推定への一據所を與へるものと云へる。卽ち銅劍銅鉾の利器を好尙する傳播は多分の大陸的着彩を帶び其門戸を西部九州とするに對し、半島的色彩の多分に加味されたものが早くから漸的に傳播し遂に銅鐸を所產するに至つたとする。